

## ◎ シンポジウム「外国人児童生徒の教育の明日を考える」概要報告

去る10月1日(土)に宇都宮大学キャンパスにて、シンポジウム「外国人児童生徒の教育の明日を考える」が開催されました。その概要報告を大学院生の坂本さんからいただきました。編集人は数年前から栃木県という地域の視点として、宇都宮大学国際学部に、ポルトガル語とポルトガル語圏文化の専門家の必要性を感じていました。

宇都宮大学では、16年度より、重点推進研究プロジェクト「在日外国人児童生徒の教育環境をめぐる問題—栃木県内の現状と課題」(研究代表者：国際学部教授 田巻松雄)として、栃木県内における在日外国人児童生徒の教育環境をめぐる問題についての実態調査を行っています。本シンポジウムは、このプロジェクトの一環として行われました。

現在、全国には200万人を超える外国人の方が暮らしていると言われ、栃木県内にも32,023人(平成16年12月末日現在)の外国人の方が暮らしています。また、近年の外国人労働者の定住化に伴い、外国籍の子どもの数も増加しています。さらに今後、少子高齢化を向かえる日本社会で、外国人労働者や外国籍の子どものますますの増加が予想されます。

在日外国人の子どもの増加とともに、子どもが抱える問題は多様化してきています。在日外国人の子どもは、日本語や母語、教科学習や進路の問題、在留資格の問題など多様で複雑な問題の狭間に置かれています。特に教育に関する問題は、子どもたちの将来、日本の将来にとって重要な問題となってきています。学校からドロップアウトする、いわゆる不就学児童生徒の存在も大きくなってきています。

このようなコンテキストの中で、私たちは今、在日外国人の子どもの教育環境整備を迫られています。しかし、全国的にも在日外国人の子どもの教育環境に関する調査は少なく、そのほとんどがある特定のエスニシティを対象にしたものや、特定の市や町を対象にしたものです。本プロジェクトは、栃木県全体を視野に入れながら、全ての外国籍の子どもの対象として行われています。その意味において、本プロジェクトは先駆的な研究といえます。

子どもたちの抱える多様で複雑な問題の多くは、各自治体や日本語指導担当教員、外国人児童生徒担当教員に対応が任せられ、問題や取り組みは閉鎖的な環境の中でその対応を迫られています。また、県単位で見た際に、各自治体や学校現場が抱える在日外国人の子どもの問題や取り組みなどの情報の共有化は、ほとんどなされていません。そのため、個々

に存在する良い取り組みも活かされていないのが現状です。

このような現況から企画されたのが、本シンポジウムです。調査経過を報告するとともに、在日外国人の子どもに関わる人々やこのような問題を知らない人々が一堂に会し、意見交換できる場を作りたいとの思いから開催されました。

当日は、各自治体の教育委員会、日本語指導担当教員、地域ボランティア、研究関係者など、70人以上の参加がありました。

第一部では、**駒井 洋氏**（中京女子大学教授）より特別講演「外国人問題の現状と課題」と題して、外国人労働者問題の全体像をお話いただきました。

第二部では、外国人児童生徒（小学校4年生以上～中学生）や日本語指導の先生を対象に、日本語教育を中心とした学校教育の現状について行われた16年度のアンケート調査に基づいて、**鎌田美千子氏**（宇都宮大学留学生センター講師）が「栃木県における外国人児童生徒をめぐる教育環境」の実態を報告しました。また、17年度の13市行政訪問調査、日本語指導をされている方や在日外国人の子どもに関する活動をされている方々へのインタビュー調査に基づいて、**坂本文子氏**（宇都宮大学大学院国際学研究科）が「不安定な状況におかれている外国人の子どもたち」と題し、在日外国人の子どもが抱える問題の類型化を試みたとともに、これからの課題を報告しました。

第三部では、パネルディスカッション「栃木県における外国人児童生徒の教育の明日を考える」が行われました。総合司会は、国際学部・**田巻松雄教授**。パネリストには、真岡市教育委員会事務局・**大越武氏**、宇都宮市教育委員会日本語指導講師・**大畑美優紀氏**、小山市立旭小学校・**坂本鈴子氏**、ボランティア通訳相談員・**中島里美氏**にご参加いただき、仕事や生活を通じた実体験を元に在日外国人の子どもたちの抱える問題の実態をお話いただきました。その後、会場からも約一時間にわたって活発な現状報告がされました。

ご参加いただいた方々からは、「早くこのような場が欲しかった」「これからも続けて欲しい」などの感想をいただきました。本シンポジウムは、在日外国人子どもの教育に関する問題への取り組みにとって、始まりに過ぎません。大学研究機関が地域にできること、地域と共にできることを改めて確認できた場であったと同時に、今後もこのような活動の継続が地域社会から求められています。

既に、来年10月にも「在日外国人の教育の明日を考える'06」を開催しようと話し合っています。

（文責：国際社会研究専攻2年 坂本文子）

## ◎ 宇都宮大学 一般公開シンポジウム開催

9月23日(金)午後1時半から4時半まで、栃木県青年会館(コンセーレ)において、宇都宮大学 国際キャリア・合宿セミナー2005の一般公開シンポジウムとして、第1部 基調講演『世界の平和と国連』のテーマで、スリランカ問題担当日本政府代表・元国連事務次長の**明石 康氏**が講演されました。アジアと世界で尊敬され存在感のある国になるために、国際

平和の構築に向けて日本が果たすべき役割とはどのようなものかを考える講演内容でした。質疑の中で、明石氏は「顔の見える日本人」、つまり国際的に活躍できる人材の育成が大事であると指摘されました。第2部 パネル討論「国際社会における日本人の活路と存在感」のテーマで、石井雅子氏、伊藤解子氏、岡村恭子氏、川上千春氏、早乙女賢二氏、佐久間勝彦氏、松本淳氏、矢島亮一氏、柳澤秀夫氏の9名のパネリストの方々、そしてコーディネーターに国際学部教授 友松篤信先生が担当し、活発な討論が展開されましたが、時間の制約が大変悔やまれるものでした。なお、パネリストの矢島氏は在學生で、合宿セミナーの講師もされました。<http://www.terrakoya.or.jp/newpage2.htm>

#### ◎ 国立釜慶大学とのユネスコ・大学生交流プログラム、歓迎パーティー開催

11月17日(木)に、宇都宮大学 大学会館談話室にて、2005年 ACCU・ユネスコ青年交流信託基金事業大学生交流プログラムを「世界遺産都市間の文化的人的交流：持続的文化都市形成を目指して(日光と慶州)」と題して、韓国・釜慶大学校の教員・学生を迎えた歓迎パーティーが開催されました。その時の様子は国際学部 HP をご参照下さい。

[http://www.afis.jp/mt-static/archives/2005/11/post\\_9.html](http://www.afis.jp/mt-static/archives/2005/11/post_9.html)

#### ◎ 国立釜慶大学とのユネスコ・大学生交流プログラム、記念講演・シンポジウム開催

11月20日(日)午後1時から4時まで、宇都宮大学 大学会館多目的ホールにて、第1部 記念講演「ユネスコの誕生と世界遺産」のテーマで、宇都宮大学教授・キャリア教育センター長 宮崎冴子先生が配布資料を使った、大変わかりやすい興味深い講演でした。第2部 日韓交流シンポジウム「世界遺産の現在と未来ー日光と慶州」のテーマで、東国大学校博物館研究員 チョ・チェンヨン氏、日光ユネスコ協会会長 高橋正夫氏、宇都宮大学国際学部教授 佐々木史郎先生の3名のシンポジスト、そしてコーディネーターに宮崎冴子先生が担当されました。

#### ◎ 国立釜慶大学とのユネスコ・大学生交流プログラム、特別講演開催

11月23日(水)午前10時から12時まで、宇都宮大学 大学会館多目的ホールにて、特別講演「狂言の笑いと言のこころ」のテーマで、大蔵流狂言方・能楽師・重要無形文化財総合指定保持者 善竹十郎氏が、狂言の中に込められている笑いや欲、弱さといった人間の心について実演を交えて、大変わかりやすく講演されました。韓国の大学生にも、通訳を通して日本の伝統文化を理解する貴重な体験であったことと思います。

#### ◎ 展示会と講演会開催

宇都宮大学附属図書館では、「旧植民地関係資料室」開設記念の企画展示を11月20日(日)から12月22日(木)午前9時から午後5時まで、峰キャンパス附属図書館本館3階閲覧室にて開催中です。戦火をくぐった貴重な資料が展示されていますので、専門家ばかりでな

く、地域理解という視点からも多くの方に、ぜひご覧いただければと思います。なお、企画展示名は『戦後60年、資料で見る「満洲」』で、宇都宮高等農林学校時代の図書や雑誌・掛け軸を中心に展示されています。

記念講演会『「満洲」と関係資料』は、峰ヶ丘祭期間中の11月23日(祝・勤労感謝の日)、午後1時から3時まで、峰キャンパス附属図書館本館3階会議室にて、宇都宮大学国際学部教授 **伊藤一彦**先生を迎えて開催されました。

## ◎ 掲載記事紹介

1. 朝日新聞6月17日(金)に、「大学の窓から-64 ジーコ監督に学ぶ」のコラムで**中村祐司**先生の記事が掲載されました。同紙7月8日(金)に「大学の窓から-65 「弱者狙い」許すな」、同紙8月27日(土)に「大学の窓から-67 放送大生のオアシス」、同紙9月2日(金)に「大学の窓から-68 石綿 県も情報を」、同紙9月16日(金)に「大学の窓から-70 政策への見極めを」、同紙9月23日(金)に「大学の窓から-71 「相互理解」違い痛感」、同紙9月30日(金)「大学の窓から-72 経営監視の眼力を」の内容で連続掲載されました。

2. 東京新聞6月17日(金)に、「留学生通信」コーナーで院生2年の**賈臨宇**さんによる「めっちゃ好きやねん」と題した原稿が掲載されました。

3. 下野新聞6月18日(土)に、**中村祐司**先生の県北政経懇話会での講演会記事が紹介されました。

4. 朝日新聞6月30日(木)に、野木町国際交流協会が主催する「国際理解基礎講座」の第1回目に、**柏瀬省五**先生の「異文化理解の視点」、第2回目(7月16日)に、**佐々木史郎**先生の「韓国の生活文化を知る」と題した講義の紹介が掲載されました。

5. 下野新聞7月9日(土)に、「私の下野新聞批評」の執筆者として**松金公正**先生が紹介されました。7月10日(日)では「戦争と平和 本紙の見解を」、8月15日(月)では「戦争体験 継承方法が課題」、9月19日(月)では「選挙争点伝え切れたか」のテーマで原稿が掲載されました。

6. 下野新聞9月25日(日)の日曜論壇で、**中村祐司**先生が「スポーツ環境資源充実を」と題して原稿が掲載されました。

7. UU now 第3号(2005. 11. 20 発行)の3頁に座談会「双方向でコミュニケーション、それがメディアの理想形」と題して、院生1年の**船橋 誠**さんの記事が掲載されました。

([http://www.utsunomiya-u.ac.jp/info/uunow/uunow-pdf/uu3/3\\_3.pdf](http://www.utsunomiya-u.ac.jp/info/uunow/uunow-pdf/uu3/3_3.pdf))

8. 宇都宮大学留学生センター・ニュース 第7号に、院生1年の**李文玲**さんの「私のホームステイ体験記」が掲載されました。

9. 総合情報処理センターニュース第37号(2005. 10. 25 発行)の巻頭に、総合情報処理センター長 **片桐雅義**先生のあいさつ文が掲載されました。

## ◎ 国際学部だより

### 1. U.U.NOW 3号 特集 スタートしたメディア教育

2 頁に国際学部 4 年 佐藤つかささんの原稿と 3 頁にとちぎテレビのアナウンサーで国際学部OG 阿部由佳さんの座談会の記事が掲載されました。

### 2. 下野新聞 7 月 31 日 「ジャズのまち」 定着狙い提言

宇都宮大学国際学部行政学研究室(中村祐司研究室)の 3 年生たちが、学生の中から見たまちづくり案を検討した記事が紹介されました。

### 3. 下野新聞 8 月 6 日 若者が語る憲法 宇大生が座談会

とちぎ戦後 60 年の関連特集で、座談会の記事が掲載されました。

**研究室訪問 08** 第 9 号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。第 8 回目には、留学生センター所属の吉田先生にお願いしました。

#### 「私の研究課題」

吉田一彦

私は研究課題として、次の 5 つを掲げている。

- 1) 自然言語、特に日本語を対象とした機能語（文法的な役割を担う語）のはたらきの研究（特に、いわゆる「格助詞」の機能の再検討、場面指示・文脈指示の統合的説明、など）
- 2) 外国語教育の基礎研究としての対照言語研究（特に、日本語とタイ語、日本語とモンゴル語）
- 3) 言語コミュニケーション及び言語研究における〈規則〉の問題の探究（いわゆる「規則」と「規則性」の相違の問題や、言語教育で〈規則を教える〉ということの意義の再検討、など）
- 4) インターネット技術をベースにし教師自身による内容の編集・改変可能性を追求した外国語教材開発ツールの開発
- 5) 高等教育機関における留学生教育の方法

ずいぶんバラバラだという人もいるが、この 5 つは自分の中では相互に関連したものとして存在している。これらの課題の相互関係について語ることにより、私の研究がどんなものか分かってもらえると思われる。自分にとって最大の関心の対象は人の話す言語、自然言語である。これがコミュニケーションに供するひとつの記号の体系としてどのようなものか明らかにしたい、というのが第一の希望である。そしてそれが、人が使うひとつの体系である以上、外から眺める、具体的には、伝え合う人や状況へ着目するということが必要になると私は考える。こうした観点を持ちつづける手段として、これらの 5 つの研究課題を掲げた追究がある。

研究の出発点は、自分自身天職と思っている日本語教師としての能力を、どのように向上させられるのかと考えたことであった。教室が学習者にとって言語習得のための唯一の場でないということは自明のことだが、そうだとすると、言語習得のために特化された場

としての語学教室には習得の効率性が求められてしかるべきである。しかし、格助詞の「が」のように、習得が困難な項目だという理解が教師の側に存在する一方で、教師の助けを借りずに、むしろ母語話者との実際のコミュニケーションの経験に頼ってこそ成功裏に習得されていると思われる学習項目が存在する。となると、その学習項目に限って言えば、授業や教師の存在意義自体が疑われかねないということになる。このような問題に直面して、日本語教師はどうすればよいのかという疑問が、研究活動の出発点であった。

この問題の解決を目指すとするれば、次の2つの研究の方向性が生じる。

第一に、教育のための道具・手段・制度を問い直すという方向である。この方向で、認知科学の状況論的アプローチを応用し、外国語教育における学校、コース、教室活動、教師＝学生間の関係、学生＝学生間の関係の検討を行ってきた。また、道具には有用性が必要不可欠なものであるという自明のことを認め、特定の種類の道具を使用すること自体が目的化している **e-learning** のあり方を批判的に見て、教師自身による内容の編集・改変が可能な **Web** ベースの復習教材の開発を行ってきた。

第二に、学習項目の立て方自体を問い直すという方向である。このためには、まず、1) 言語教育に応用し得るものとしての言語研究における現象記述のありかたを見直さなければならない。たとえば、類似の接続表現「から」と「ので」の使用について、「後件が命令・勧誘・意志のときは『から』を使え」ということを規則として教える教師がいる。こうした規則は、日本語学における記述研究にもとづいている。しかし、このような記述と実際の話者の心の動きとの間には大きな乖離がある。話者は「後に命令の表現が来るから使う」というように後出する言語形式を予測して「から」を選ぶのではないし、「命令の場合は、たいてい『ので』ではなくて『から』だ」というような確率論的な処理をしているのでもない。「から」が文脈と伝達したい内容とに適合しているからこそ、「から」と言うだけなのである。こうした適合性の実質こそが、学習項目の持つ特性として教えられるべきなのではないか。こうした見方から、いわゆる格助詞の機能の再検討、場面指示・文脈指示の統合的説明などをこれまでやってきた。

また、2) 学習項目は、2つの言語間の音形のある言語形式を対照した結果のみに頼って立てられることが多いが、その方法ではカバーしきれない問題が実際にあることにも着目しなければならない。たとえば、「いわゆる **tenseless language** である中国語話者は、動詞の『する』『した』の形の使い分けがうまくできないので、間違わなくなるまで形式的練習を繰り返すべきである」という主張があるが、そのような繰り返しが状況を改善したという話はそれほど聞かれてこない。中国語話者に時間の前後関係の区別をする能力がない、ということでももちろんない。日本語話者が「～た」の形をキューとして行き来する認識のうえでの時系列上の行き来が、中国語話者の場合に何をキューとしてどのように行われているのかということ調べてみるべきであり、それが分かってこそ、「～た」の形式を使う意義を学習者に対して主張できるのである。そしてそれが、つねに音形を伴う特定の言語形式である、という保証はどこにもない。このようなことから、いわゆる狭義の文法学

と語用論との境界部分には、問い直すべき問題がいくつか存在しているように思われるのである。

さらに、3)「否定の文では『が』ではなく『は』を使え」というような、学習項目自体の機能・用法の理解を学習者に求めず、ただ学習者が非文を生産する確率を下げるためだけに教えられる規則がある。このような規則は、学習者の言語の生産性を高めることには役立たない。こうしたことの是非を明確にするためには、言語コミュニケーション、及び、言語研究における〈規則〉を、言語哲学の問題として取り上げて検討することが有用である。

以上のような方向性は、単に根源的な問題を掘り起こそうとするだけのものではない。問い直した結果出てきたものは、実際の教授活動によって有用性を検証してこそ、教育学上の成果と呼べるものになる。(その検証の場が、私の場合、宇大という高等教育機関における留学生教育であり、したがって、5 が研究課題として立てられている。) こうした意味で、自分自身、日本語教育の場から離れることなく実践を継続しながら、研究をすすめていきたいと考えている。

**知究人 05** 第 9 号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。第 16 号の第 5 回目も、寄稿者を探しているところですのでお休みします。

**フォーラム** 第 4 号からこのコーナーをラテン語のフォーラムとします。2005 年の師走を迎えて、皆様忙しいことと思います。(原稿集めに苦勞しています。)今回は、藤田研究室 OG・朴海銀さんをお願いしました。

### 寒い国カナダより トロントにての見聞一

朴 海銀

語学留学のためトロントに来て 8 ヶ月が過ぎました。出発日程との調整で卒業式に出席できなかったこといまだに残念に思っています。皆様御機嫌はいかがでしょう。

私は、現在トロントのダウンタウンに位置している KGIC (King Gorge International College) の BEDP (Business English Diploma Program) コースに在学しており、2 週間前から実習 (Practicum) のため CANFAR (Canadian foundation of AIDE Research) にボランティアとして通っています。

今年の 3 月にトロントに来たときにまだ雪が残っていた覚えがありますが、夏秋の季節もあつと言う間で、早くもこの冬の 2 回目の雪が降り、外は銀色の世界になりました。今日はここトロントに来て異文化だなあと感じたことをまとめてみたいと思っています。

カナダは移民国であるためいろんな民族の人が混ざって生活しています。多くの移民して来た人たちは自分の町を作り、民族の風習を保有しています。トロントには中華街 (China Town)、韓国人街 (Korean Town)、ギリシア人街 (Greek Town)、インド人街 (Little India)、

イタリア人街 (Little Italy) などがあり、あらゆる物を売っています。あいにく日本人街はありませんが、日本人が経営しているお店やスーパーマーケットが何軒かあり、値段がやや高めではありますが、ほとんどのものが買えます。そのためバスチケット一枚さえ持っていれば、世界各国料理の本場の味を味わうことができるわけです。トロントの公共交通機関は TTC 会社が独占して経営しているため、チケット一枚でバスと地下鉄が自由に乗り換えできます。なお、市内でのチケットは距離にかかわらず一律 2.5 ドル、5 枚以上買うと 2 ドル/枚、フリーディーパスを買うと 8 ドルで一日乗り放題であるため、観光客や留学生にとって非常に便利です。ちなみにマンスリーパスは 98 ドルです。トロントには 10 種類を超えるフリーニューズペーパーがバス停、地下鉄などにおいてあり、毎日のニュースや天気予報、映画、イベント、祭りなどの情報が取得できます。

トロントの人々は挨拶をすることが大好きです。バスに乗るときも、バスから降りるときも運転手から「こんにちは」「よい一日を」などと挨拶をされ、街、バス停などでよくまったく知らない人から“Hello, How are you”と声をかけられます。挨拶を返せば天気の話など軽いトークを楽しむことができるわけです。トロントには公園が多く、天気の良い休日に公園に行けば家族連れがバーベキューをしたり、スポーツを楽しむ人たちで込み合っています。トロントは夏が短いせい私にとっては肌寒いと感じる 5 月から皆さんは早くも T シャツにスカート、半ズボンを着始めていました。こちらの人々はとにかくおおらかで、他人の目などはまったく気にせず自分の好きなように振る舞い、自分が好きな洋服を着ています。二段腹、三段腹はあって当たり前、太い脚も腕もまったくお構いなく丸出しをしています。日本から来た友達からこっちに来て初めて人の目を気にせずノースリーブを着ることができたと言われた覚えがあります。

トロントの人々はコーヒーが大好きです。町のあちらこちらにコーヒーショップが並んでいて、バス停や地下鉄、町などでコーヒーカップ（使い捨て用）を手をしている人をよく目かけます。カップのサイズといえどとにかく大きく、M サイズで 300ML はあるでしょう。学校の先生たちは授業中にもコーヒーカップを持参するくらいです。バーガーショップのコーラも 500ML はあるのではと思うくらいです。飲み物だけでなく、料理のボリュームも、すべてのものにおいて日本と比べて大きいと言っても過言ではないと思います。こちらの人々は祭りが大好きで、夏秋にかけてほとんど毎週のようにいろんなイベントが行われています。いろんなテーマで Street Festival が行われますが、その中でも有名なのは 7 月中旬に行われる Annual Beaches International Jazz Festival で世界各国から観光客が集まってきます。そのほかにもレズビアンパレード、ゲイパレード、サンタークロスパレードなどがあります。

ここでカナダの税金に関して簡単に触れたいと思います。カナダの税金は GST（国税）と PST（州税）があります。GST は 8% で全国一律ですが、PST は州によって違うため同じものであっても州によっては値段がずいぶん違ったりもします。トロントが位置しているオンタリオ州は PST が 7% ですので、GST とあわせると 15% になります。一見消費税が高いと思

うかも知れませんが、生活必需品のひとつである食品においては GST も PST もありません。その代わりに、タバコはいろんな税金でコストが高く、一箱 7 ドル前後で、輸入品ですと 10 ドル近くします。喫煙者の皆様には申し訳ないですが、非喫煙者である私としては、これは合理的だなあと思いました。

私は今ビジネス英語コースの一環として CANFAR に通っていますが、職場においての日本との違いに対して少し話したいと思います。こちらの会社の多くは服装規定 (Dress code) がなく、私服で出勤しているのがほとんどです。会社でも全体的にリラックスした雰囲気、好きなときに好きな分だけ休憩を取っている感じでした。会社に来てから朝食をとっている職員が多く、私を担当している LYNNさんはヨーガ (YOGA) を始めていますが、毎週火曜日と木曜日のお昼 1 時間くらいジムに通っていて、ランチは勤務中自分の席で食べていました。職員中の一人は健康ボール (Fitness ball) を椅子の代わりにして、仕事の間にストレッチをしたりしています。このような風景は日本の会社では見られないのではないかと思います。

トロントはこれから本格的に冬が始まるそうです。一番寒い時にはマイナス 30 度まで冷え込むと聞きましたが、トロントにての冬を体験することを楽しみにしています。皆さんも時間とお金の余裕があればトロントでクリスマスを迎えてみるのはいかがでしょうか。

(国際学研究科 国際社会研究専攻 第 4 期修了生)

### ◎ 課外活動共用施設事業資金募金状況経過報告その 3

3 月末に大学から発送された募金状況は、大学のホームページに詳細が公開されています。<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/bokin/bokinhoukoku.pdf> 同窓会の募金状況(10 月 31 日現在)は、国際学部 36 件 218.000 円の **1.0%**、教育学部 293 件 3.417.000 円の **16.8%**、工学部 235 件 2.070.000 円の **10.2%**、農学部 1.287 件 14.668.000 円の **72%**です。募金の全体から同窓会の内訳を見ますと、保護者 1.185 件 6.343.600 円の 16.73%、同窓会 1.851 件 20.373.000 円の **53.74%**、役員・教職員 293 件 6.302.000 円の 16.62%、企業・その他 151 件 4.895.000 円の 12.91%でした。なお、募金期間は平成 18 年 1 月末日まで延期されていますので、まだ募金をされていない同窓生の皆様、ご協力の程よろしく願いいたします。

さて、知求会ニュースも、無事 4 年目を配信することができました。これまでの原稿執筆者の皆様、ありがとうございます。Season's Greetings! 皆様、よいお年をお迎え下さい。

---

編集後記：限られた時間でニュース発行、同窓生の皆様のご感想はいかがでしたか？ぜひ、今後の紙面に反映させていきたいと思っておりますので、メールを下さい。また、皆さんの記事も受け付けますので、近況報告や研究報告などさまざまな情報をお寄せいただければ幸いです。同窓会会員の皆様へのお願い：住所、勤務先およびメールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。[global@minakuru.net](mailto:global@minakuru.net)

---

宇都宮大学大学院国際学研究科同窓会